

枯こ
樹じゅ
賦ふ

六三〇年
(唐・貞觀四年)

木 籙

金石書画拾遺 (18)

(古拓本)

枯樹賦

殷仲文風流儒雅每內知名代異
時移出為東陽太守岸忽不樂
願庭槐而歎曰此樹婆娑生意盡
矣至如白鹿貞松青牛文梓根極



為東陽太守

(拡大)

枯こ
樹じゅ
賦ふ

木籙室

伊藤 滋

為東陽太守

(拡大)

枯樹賦

殷仲文風流儒雅、母内知名代異、
時移出為東陽太守、岸忽々不樂、
顧庭槐而歎曰、此樹婆娑安生意、
盡矣、至如白鹿貞松、青牛文梓、根極

北周の與信の作を褚遂良が書いたと伝えられている。拓本で伝来するのみであり、褚遂良の作とする確証はない。しかし、行書の手本として尊ばれていた。一般に知られるものとして、明代の『戲鴻堂法帖』や『玉煙堂法帖』に収められたものが有名である。他に『聽雨樓法帖』にも収められている。ここに示したのは、『聽雨樓本枯樹賦』

の精拓本である。それと全く同系で一般に『古拓本枯樹賦』と称されるものを比較して示した。『古拓本』の方は、江戸時代の長崎貿易により得来されたものである。拓の状態は、非常に粗雑である。『聽雨樓本』などを元にして翻刻されたものではなからうか。ともあれ、この二件、内容、書体とも同じであるが、風韻、表現は大いに異なる。

書道芸術院
創立発起人 (15)



静岡市 酒井行雲氏藏

夢



駿府博物館藏

自作詩 (88歳)

鶴髮童顏期大椿深
衣搖擺衷心身親朋
盡集華坐裏福祿加
來喜壽人

鳥侍年八十
八

沖 六 鵬

沖六鵬は、明治28年焼津市に生まれた。不遇な少年期を過ごした六鵬は、三人の母に育てられたことは衆知の通りである。10歳の頃より書を習い展覧会にも入賞している。その後、提灯屋、建具屋等で丁稚奉公を続けるが、学に志し、明治44年に上京、苦学の傍ら小野鷺堂の斯華会に入り書を学ぶ。大正4年、徴兵検査の為兄の住む名古屋に移り、漢詩、南画を学ぶと共に、書を大島君川に学んだ。

大正8年に再び上京、日本大学美術科に入学するも関東大震災に遇い、藤枝に帰り近藤雪竹の門下となった。

昭和2年、近藤雪竹の逝去に伴ない比田井天來の門下となる。この年静岡市に移住、師範学校の教員を勤めた。

昭和5年、泰東展第一回展で特選、翌年の二回展には文部大臣賞を受賞、11年には泰東書道院理事審査員となり昭和20年まで務めた。

昭和21年、書道芸術院総務理事審査員となる。翌22年、日展五科開設に及び出品、毎年入選を果し、27年日展会員に推挙された。

昭和31年東方書道院創立にあたり、小浜梅窓に書芸院での活動を託し、晩年は東方同人審査員として活躍した。

昭和57年8月死去、享年88歳であった。

(小浜大明記)

書のひろば

理事長 恩地 晋洋

書道芸術—伝統的な日本の書道は、
バランス、筆法、リズム、静寂の
優雅な調和である。(続)

文 アーミンタ ウォレイス
訳 藤原 聖美

3000年もの歴史を持つ書道とい
うものが、そもそも中国から日本へ渡っ
てきたのだから、日本の書道芸術のテー
マにおけるパリエーションが膨大な数
になるのもうなずける。けれどもそれ
はそれまでの口述の詩歌の伝統を大い
に発展させた。日本語は漢の時代、つ
まり、キリスト誕生から5世紀ぐらい
までの間に仏教の僧が日本に漢字を伝
えるまで書くという形式はなかった。
10世紀までに書道、すなわち「書く方
法」がありふれたものになった。「料
紙」として知られている染められた紙、
すなわち、金銀の花もようがほどこさ
れた紙に書かれたことな書は、紀貫
之や小野道風のような日本の宮廷の書
家によって書かれた。そして、それに
続く2世紀間は、一般的に日本の古典
書道の黄金時代となった。

個々の表現の種は初めからまかれて
いた。いくつもの異なった書体が日本
の書物の中で使われた。「漢字」とい
うもともと中国で使われていた文字は

一つ一つ意味を持っている。

さらに言葉は文字を組み合わせて作
られている。たとえば、「電気」+
「車」で「電車」というふうにある。
漢字を取り入れた時、日本人はもとも
と日本にあった言葉と発音を漢字に対
応させて結びつけた。現代の日本語は
名詞、形容詞、副詞、動詞を使って文
ができていく。しかし、日本語は、漢
字だけでは完全に書くことができない。
文法上の語尾と外国語は、音節を基盤
とした文字が使われる。集合的に「カ
ナ」と呼ばれるひらがなとカタカナで
ある。ひらがなは筆記体のような続け
字で、カタカナは角ばった形だ。

それだけでは十分ではないかのよう
に、もともと中国文字である漢字は日
本人によってさまざまに違った方法で
書かれてきた。篆書(印の文字)、隸
書(写本筆写の文字)、楷書(アルファ
ベットのブロック体のようなもの)、

行書(ややくずした文字)、草書(く
ずした文字)がある。

日本語は男性と女性で全く、別々に
使われて発達した。中国語を原文で読
める聖職者層の男性は、大部分、漢字
を使って書いた。一方、女性は漢字を
使えなかった。かなのつづりだけ
を使った。こういった事実が日本書道
の歴史をさらに複雑にした。13世紀か
ら後の武士の時代は、それ以前の貴族
的な洗練された優雅なものよりもつ
と力強く、実用的な書き方が好まれる
傾向があった。

書の複雑な歴史には、日本文化の伝
統のさまざまな要素が、からんでいる。
たとえば、茶の湯の席では、みことな
書を鑑賞するのがふつうである。「掛
け軸」といわれる特別に書かれた作品
が茶室の床の間に飾られてあり、お茶
席に招かれた人々は、それを見て、学
んだり楽しんだりするのである。禅宗
の教典(仏典)を信仰修養のしきたり
として写経したものは、価値はないに
せよ9世紀の「ケルズの書」に見られ
る原典に基づいて作られた精巧な装飾
写本や他の古いアイルランドの写本と
同じようにたくさんある。こういった
ものも、書の様式に影響を及ぼしてい
るのは確かである。

今日においてもなお、日本の書家は
完璧な作品を創作するために、心身を
しっかり鍛えておかなければならない
と主張する。弓道を思い浮かべてみる
と、的に矢を放つ射手をではなく矢が

放たれた瞬間の射手の集中力の質の高
さを、であるが、もし、射手が集中し
て正確に焦点を合わせることができれ
ばの方が弓を引き寄せるといふ。書
道作品を創作するのも内面的には集中
力を養い、外面的には表現力をつける
という意味で、何かこれと同じような
作用があるのかもしれない。

〈中島邑水先生臨書習作集〉



「古典探訪 I、II、III」(尺牘)

※1セット 6,000円

※申込み先 〒181-0013

三鷹市下連雀2-24-5

村野大仙方 生成社事務局



漢字 (三)

上妻華竹

先日、新聞で或アーティストの記事と遭遇した。ボクシンググローブに墨汁や絵の具をつけてキャンパスを打つ「ボクシングペインティング」という



第42回竹扇会書展出品 上妻華竹書

(世)

ものだ。大きなキャンパスの前で、身体中、墨や絵の具まみれで仁王立ちのアーティストの写真に大変エネルギー感がある。世界的に活躍されていると思う。いろいろな表現手段があるんだと感心した。

広辞苑で「芸術」を引いてみた。

「特殊の材料・技巧・様式などによる美の創作・表現」とある。ついでに英和辞典でartも引いてみた。先ず、「人工」。そして「芸術」とある。人工とは思いがけない言葉だった。確かに私達のしている事は、人工的な仕事なんだ。芸術とアートとは、言葉集の響き・イメージが異なるように思う。前記の「ボクシングペインティング」は、やはりアートと言わなければならない。筆と墨を使って、漢字やかなを書く。「書」は芸術と呼びたい。そして、あくまで美の追求者でありたいと思う。

21世紀の書

—私の主張—

前衛書 (三)

真下京子

書道の団体も主義や主張が個々異なることもあり、結成・離脱が繰り返されている。書道芸術院創立後、奎星会、墨人会、草人社、独立書道会、現代書作家協会等結成していった方々もいる。

私の師も芸術院20周年を境に退会された。私にはその経緯はわからない。私はひとりの道を選んだのである。

私は、比田井天来の息子南谷への遺訓「ゆきづま、たら古に還れ」

の言を思い出し、甲骨文・金文から手をつけてみた。

文字の誕生は古代人の創造の賜、前衛書の原点である。臨書し学ぶ中で、未知なるものを考え出すという共通項に気づいたのである。甲骨文・金文に始まり、その他古典といわれるものをするうちに、その中に時代背景を感じ、様々な墨線に心弾ませるようになった。書道室中を古代文字で埋め尽くしてみたり、画紙六枚にもなる大作に気持ちをぶつけてみたり、自問自答し試行錯誤を重ね書作に明け暮れた。1995年高崎シティギャラリーで開催を催した。これを機にその後の方向を見極めることが出来た気がする。

古典に対峙してこそ、創造の礎に出会うのである。



平成8年 会場作品



高崎シティギャラリーで開催会場 (作品解説風景)

〔解説〕

顔氏家廟碑は、顔真卿72歳の書。一字ごとに界線一ばいに堂々と書かれている。文字の形は、樹目を一つのメドとする程度で、点画や字形はいずれも何の虚飾もなく、直筆蔵録で、72年のこれまでの人生

を鋒先の一点に集中し、ひたすら黙々と運筆する彼の姿を劈斬とさせるのである。その気力の張りが点画に漲り、一字を貫き自然にそれぞれの文字を構築している。

(編集部)

〔注〕

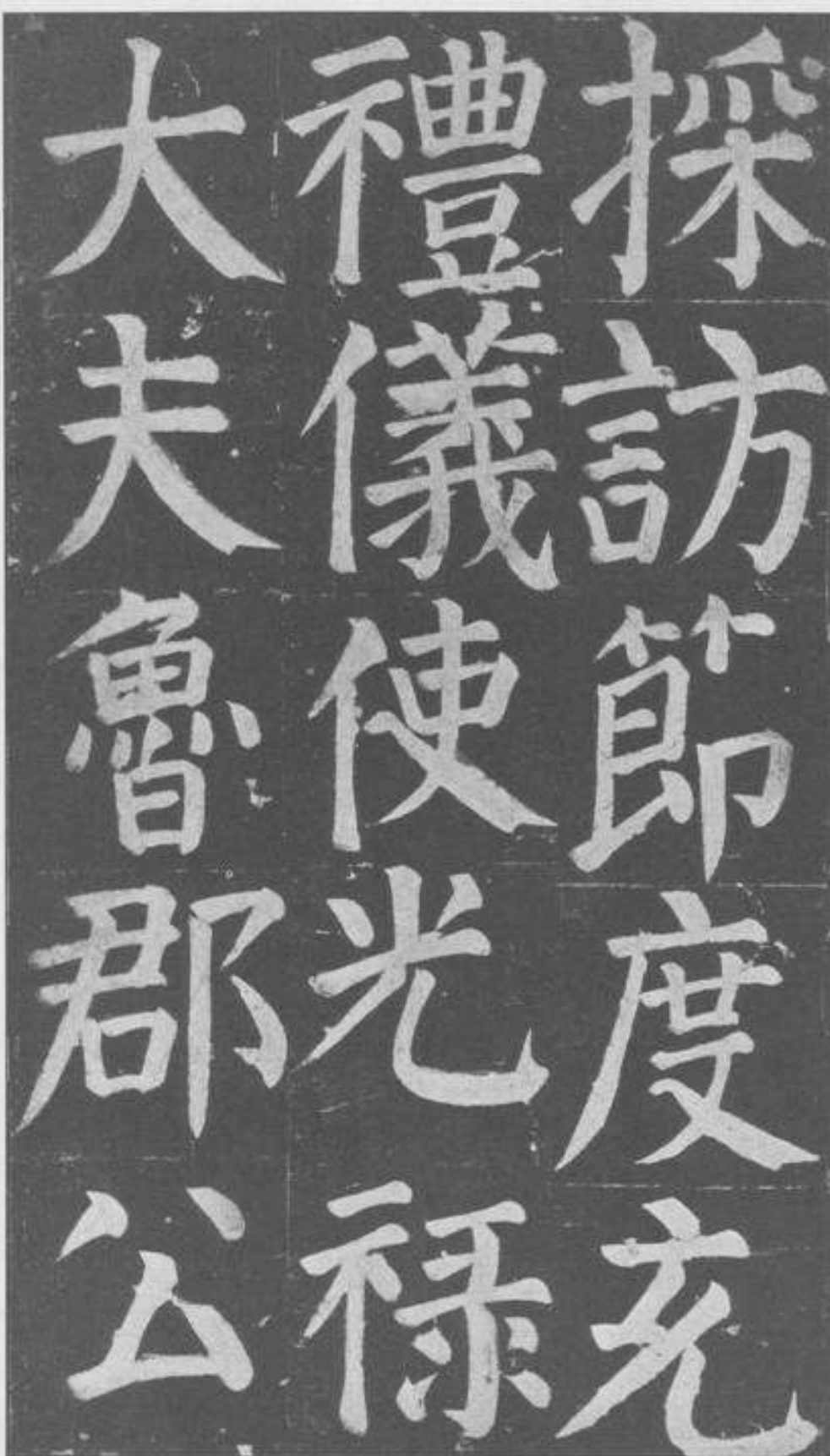
漢字研究部蔵書作品は、左の法帖の中から、何文字臨書してもよい。(掲載部分以外は不可)

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

〇〇臨

(押印のみ可)



採訪節度充

禮儀使光祿

大夫魯郡公

用紙

・半紙普通判(料紙可)

(たて長に使用)

・別紙を裁断して貼付は不可。

注 かな研究部競書作品は、
左の古筆の掲載部分より歌一
首以上を書く。(全臨も可)

※落款を必ず入れる。署名、
もしくは○○臨
(押印のみも可)

大とものやかもち
かしはきのもりのしたこそこひしけれ
そのこまほしきほどのへぬれば
あるをんなのつれなかりければ
よしのぶ
さりともとたのむころにはかられて
しなれぬものはいのちなりけり

〔解説〕

香紙切は、今でも時に出現して資

料の数が流動的だが、およそ67葉、

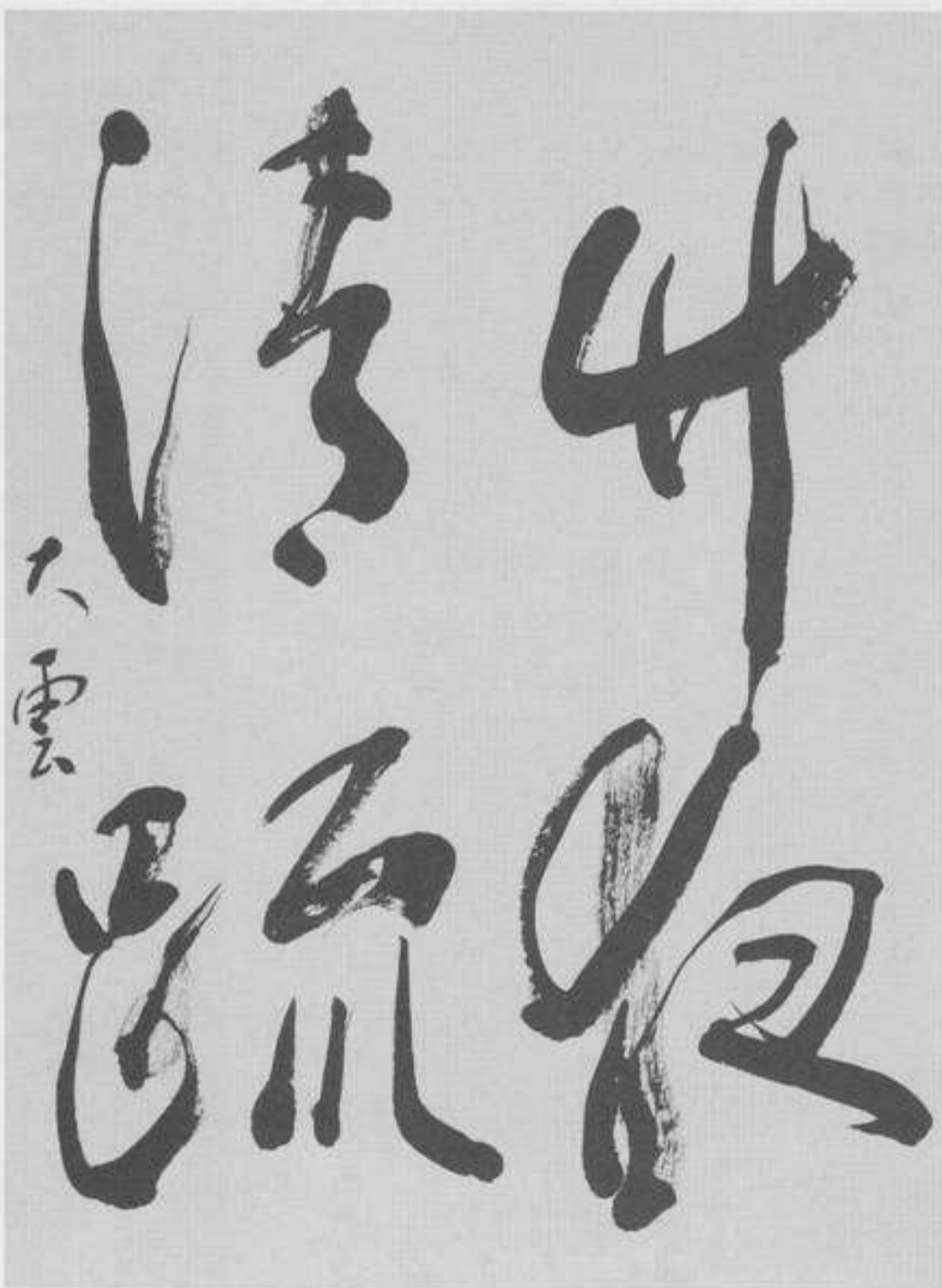
別余首ばかりが知られている。

筆者を女流歌人として有名な小大

君と伝えるが確証はなく、11世紀末

の書写と推定されている。また、筆
者は、心のおもむくままに筆を走らせ
た様子でその無邪気で自由な表情が
女性の書といわれてきた。時に走りす
ぎて形が崩れた文字もある。(編集部)

大とものやかもち
かしはきのもりのしたこそこひしけれ
そのこまほしきほどのへぬれば
あるをんなのつれなかりければ
よしのぶ
さりともとたのむころにはかられて
しなれぬものはいのちなりけり



習い方解説 (三)

辻元大雲

竹夜清疏

竹林を渡る夜風の爽やかさを歌った句です。草書を主体として、ゆったりとのびやかな表現を試みました。

漢字上級は書体自由です。楷書、行書の基本的なスタイルのほかに今回の参考例のように草書と行書を組み合わせる、さらに篆書、隸書と様々な表現が楽しめます。それら書体の変化を自由に使い分けるには幅広い古典学習が基礎となります。自らの学習の柱として特定の古典や作家の研究もなくてはならぬものですが、多様な表現に対応できる幅広い古典臨書学習は常に怠ることはできません。食わず嫌いとやらぬよう、基礎基本としての力を養う。健康上の栄養のバランスと同じです。古典の学習は奥深く、幅広いものです。楽しんでながら挑戦してください。



気新光照

よみ(気新たに光(輝)照らか)

小扇書

書体：楷書

習い方解説 ③

小伏小扇

気新光照

(気新たに光(輝)照らか)

気清新にして光(輝)が明らか
なこと。 [王讀]

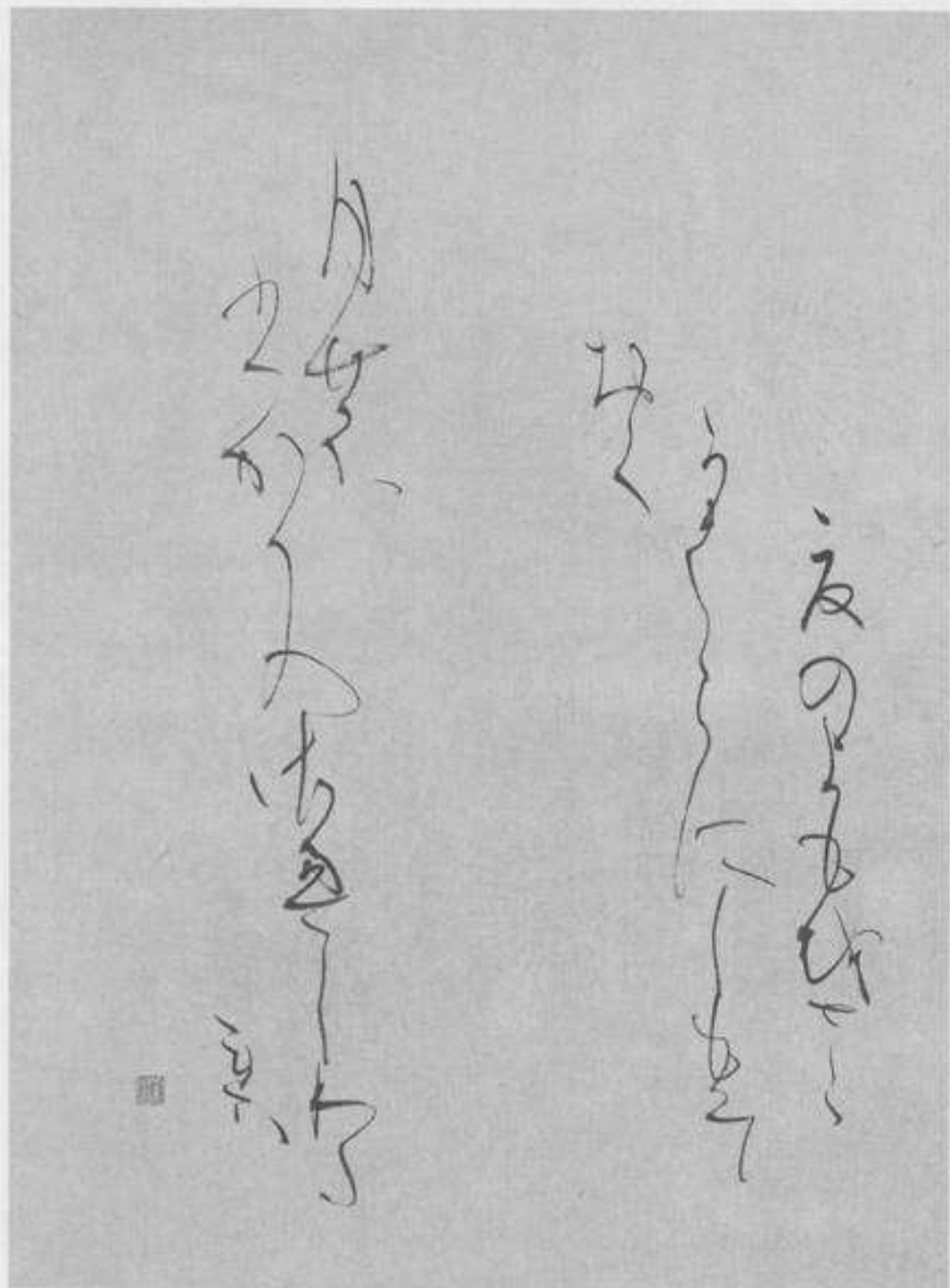
今回は北魏の張猛龍碑をベースに書作しました。張猛龍碑は、すべての点画に躍動感が充満しています。逆筆を剛快に駆使していますが、筆勢はあくまで内蔵する必要があることです。

「気」構えに留意して懐を大きくとります。

「新」へんとつくりのバランスに注意して。

「光」頭部が小さくならないように。

「照」列火が躍動するように、筆に上下運動を加えます。



習い方解説 (二)

下谷洋子

夏の夜も小笹が原に霜ぞおく月の光のさえしわたれば

(西行)

かなの美しさは白にあります。余白とは余った白でなく、生きて(動いて)いる白、空間のことを言います。かなの散らし表現も、その余白美の演出になります。散らしは、基本的には三角法といい、三角形を基に構成されていることが多いので、応用して実作されて下さい。この作も、月のを頂点にほぼ三角を成しています。

また、短い行を配して中央の間が平板にならないようにしましたが、この短い行の各々にも変化のあることが、全体の中で一枚の絵のような遠近感を醸し出すのです。

霜ぞおく。月光の白々と冴えた様子を例えたもの

よみ方

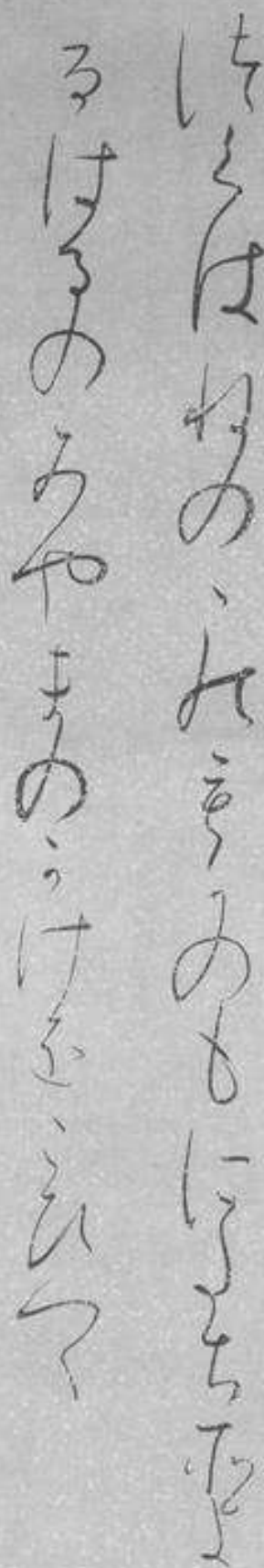
夏(よ)も(越)さ(可)が(者)ら(に)し(も)ぞ(お)く(久)月(の)光(ひ)の(さ)え(し)わた(る)ば(八)

創作

かな規定 秀級以下 【七月二十日締めきり】 用紙 半紙タテ1・2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連続）を臨書する。

高野切第三種
（掲載写真縮小93%）



よみ方 つ(徒)く(久)ばねのこの(能)も(毛)か(可)のものた(多)ちぞ(所)よ

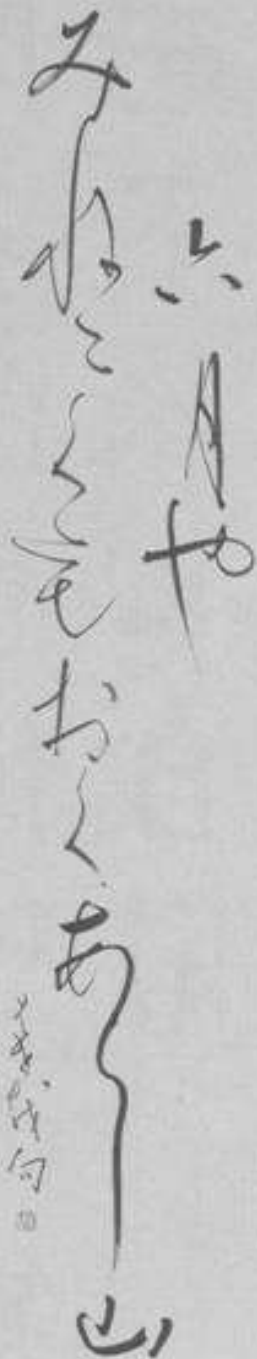
るはるのみやまのか(可)げをこひつ、

習い方解説 ③

石井明子

かな条幅規定 【七月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切（料紙可）

石井明子 選書



六月むつきの炎なほ天下あめの嵐山あらしやまをよんだ力ちから

（芭蕉）

強い俳句です。そのことを意識して、字数が少ないための貧弱さや寂しい感じは極力避けたいと願いました。構成は基本的な二行書きですが、漢字の多用で一行にすれば異った趣になります。

小さめの柔らかい毛の短鋒を使用しました。墨は参考手本より少なめに、字粒は慎重に考えること。

*たて形式に限る

よみ方 六月むつきやみねに（こ）く（久）も（毛）おく（久）あらし山（は）者（者）せ（世）を（越）越（句）

創作

漢字条幅規定 初段以上 【七月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

問余何意棲碧山
笑而不答心自閑

萬城書

問余何意棲碧山 笑而不答心自閑

(余に問う何の意か碧山に棲むと 笑って答えず心自ら閑なり)

書体 自由

漢字条幅規定 秀級以下 【七月二十日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

萩原香扇選書

泉香而酒冽

香扇書

泉香而酒冽

(泉香りて酒冽し)

書体 自由

習い方解説 (三)

種谷萬城

李白の七言絶句「山中答俗人」の前半二句を採りました。時には桃源郷での書作に憧れます。今月は顔真卿の楷書を意識して書いてみました。起筆で筆鋒を一巻きして威鋒にし、撥ねや払いに独特の弾力を利かせた筆法が特徴的な楷書です。重厚美溢れる魅力的な書風を楽しんでください。

習い方解説 (三)

萩原香扇

泉の水で酒を醸せば、水はよい香りがし、酒は冷たく清らかであるという詩です。
中锋のやや細めの羊毛筆を使用。線に変化をつけ、細い線に流れを出し、余白を白くきかして書いてみました。

チロル地方その他に見らるる
点在した農家と牧場のあつ
風景は、だれもが注目する
美しいです。

ウィーンの風よう
書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (三)

川島舟錦

行頭、行尾を揃えることは、見た目を美しくするひとつの方法かと思えます。ことばの途中で行が変わることをできるだけ避け、読みやすくすることを心がけたいものです。

行書体は点画がやわらか、速く書けて読みやすいのが特徴です。漢字は大きめ、ひらがなはやや小さめに調和よく書いてみましょう。

※落款を入れ忘れないようにして下さい。(落款は自分の名前を入れてください。)

ホープ作品
各部総評

NO. 551

かな部 師範 鈴木 朝夫

押さえめの字粒が静かな世界を創り、前半と後半の響きあい絶妙な余白美を生んだ見事な作品。
◎かな部総評 全般に字が小さく伸びやかさに欠ける作品が多かった。さらに獨創性のある構成を試みる努力を望みます。(明子評)



かな部 師範 五段 五代久美子

緻密な動きで丁寧に運び、華やかではないが堅実さが好ましい。このリズムの呼吸を大切にノ。
◎かな部総評 漢字の崩しに誤字が多かった。解りにくいものは必ず確認してほしい。淡墨すぎると濃淡が出ません。(洋子評)

前衛書部 特選 外谷 直子

淡墨による重厚さ、渴筆による流麗さのバランスすばらしい。左下部の塊は不要に感じる。
◎前衛書部総評 今回、重厚さ・迫力さを感じる作が少ない。余白の美の表現が多かった。(洞仙評)



漢字条幅部 師範 安藤 華祥

氣迫じゅうぶんに、スケールの大きな隸書、懐の広い豊かな心情が伺われて頼もしい。大成を。



現代詩文書部 特選 橋本 白汀

漢字中心の俳句を、しっかりした深みのある線で、三行をそれぞれ変化を持たせた美しい作品です。
◎現代詩文書部総評 墨色と用紙の調和に工夫を。また印泥や押印の配慮もお忘れなく。(蘭華評)



◎漢字条幅部総評 半折という限られた紙面に書者の全人格を托す。思想、感情、感覚の全てが集約されたもの、書は人なり。(春洋評)



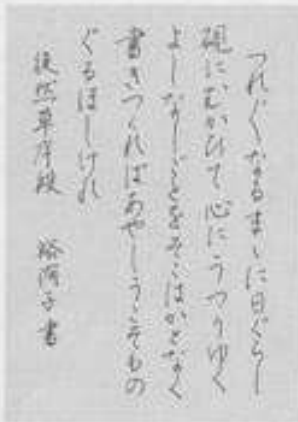
漢字部 師範 加藤 紫翠

運筆のリズムよく切れ味の爽やかな作。潤濁の変化も程よくまとまりあり。雅印ももう少し丁寧に。
◎漢字部総評 上級六文字表現は安定作多いが、もっと表現の工夫を。下級の楷書は基礎力を養う意味で色々な書風に挑戦を。(大雲評)



ペン字部 師範 重信裕侑子

点画確実に書き実力迫力共にある、主張あるペン字作で安定感もあり推しました更なるご精進を。
◎ペン字部総評 徒然草誰もが一度は口遊んだ序、誤字もなく佳作が多かった。退屈ですることもない憧れの古文ですね。(京華評)



特別研究部優秀作品(特選)

現代詩文書

米倉聲香

(声香)

「岡本おさみ詩」



米倉聲香書

◆落款印が気になった所を本分のゆったりして激げしさもある圧倒的な書き方で消し飛んだ感じ。一行目の引き締まった表現が好きだ。(倫子評)

◆どっかりと、落ちついた雰囲気、潤滑巧みにまとめた抒情作。これはこれでよいが、渴筆の線が軽いので線の響きがもう少しほしい。(春洋評)

◆潤滑の変化が明快で、中央部に集約した二行に表情を与えている。線質はやや単調だが楽しいリズムを奏でている。落款印位置含め一考。(大雲評)

◆刷毛のような筆か、独特の書線が無機質な風趣を醸し、抑えた情感で他と一線を画す。問のとり方にやや不自然さを感じるが新鮮味で魅了。(洋子評)

前衛書

渋谷充律

(清流)

「無」



渋谷充律書

◆躍発力ある筆が紙面に躍り、余白の牙えと共に鮮明な作となった。潤筆が左上から右下へ一直線に並びややパターン化した感がある。(大雲評)

◆紙面全体から息もつかぬ速さで書き上げたという感じが見られる。渴筆の表れた所と余白の所が互に生かされていて躍動感に溢れている。(倫子評)

◆濃墨がほとばしり、一気呵成に書き上げた前衛書の醍醐味を見る。激しさの反面、上部の渴筆と下部の飛沫がオーバー気味に思うが……。(洋子評)

◆情熱の伝わる作、上・中と潤滑、落ちつき、下部で爆発させたが、線質やや異質の感を持つのは私だけだろうか？(春洋評)

総評

今月は99点(漢22、か14、現28、篆2、前33)の出品がありました。出品者には、常連が目立っています。が、今月は、かなに新しい作風に挑戦した、新鮮な作品が見られました。惜しくも特選は逃しましたが、次回作も大いに期待します。また前衛書にも新しいグループの作品が寄せられ、技法は未熟乍らも、新鮮な発想の作品に好感を持ちました。

この特別研究部が、多くの方々の新たな作風の開拓の場として、大いに活用される事を期待しています。どしどし出品、挑戦ください。歓迎します。(萬城)

〈特選候補者〉

漢	墨宣	鋪木	梅道
漢	八幡	馬場	寿舟
漢	華祥	安藤	華祥
か	卯月	前田	まさ美
か	大雲	佐藤	希雲
現	翠苑	氏家	久光
現	遊水	荒川	空華
現	大雲	阿部	惠泉
現	翠苑	木村	蕉苑
前	翠柳	鈴木	翠夢
前	大拙	大庭	幸石
前	蓮紅	浅野	彩紅



漢字

(墨宣) 大川代香

「五言律詩」

◆技術が先に目にはいる。うまい、理にかなっている。清爽感がある。漢詩の内容を鑑賞ができなくなった現代の日本人のかかわりは?

(春洋評)

◆連綿草三行構成は練度高く無理がない。小ぶりの長鋒筆を使用か、太細の変化はあまりないが、潤筆部の配置がバランスよくまとまりあり。

(大雲評)

◆章法に通った作品で、貫通した行間の白が美しい。畳掛けるように文字が連なるが、多彩な線の演出で技量の確かさを見る。

(洋子評)

◆全体を見た時墨つぎの場が所を得ていてまとまりがよい。細い線がゆるぎなく表現され全体の雰囲気を引き締まるものを感じさせてくれる。

(倫子評)

篆刻

(墨宣) 中山無視

「耳順」



中山無視刻

◆白のきれいな明るい構成。選字にセンスが窺え、それを布字のおもしろさで躍動した生彩感を出す。緑の変化にやや作為を感じるが楽しい。(洋子評)

◆論語の一節を一寸余角にまとめる。挑戦数回目での特選。刀の切れ味が冴え、布字のデザインが新鮮。左辺の緑やや混みすぎた感あり。(大雲評)

◆全体の雰囲気からしつとりとした落ち着きを感じる。刀の動きがゆったりとしていて見ている者に心の安らぎを与えられる。(倫子評)

◆大胆な配字の発想がよい。刀の切れよく「順」はこなれて情感あり、「耳」は少しかたく、未完か、左、下辺の線は考え過ぎ、ご一考を。(春洋評)

(春洋評)

前衛書

(湘南) 佐藤詠子

「哀歌」

◆作品が変わった。「哀歌」何があったかは知らないが、心境の変化を感じる。落ちついて静かに自分を見つめている作者がいる。

(春洋評)

◆久しぶりの快作。左から右へダイナミックに展開する気迫の作。やや墨が濁り線が平板になったのが惜しまれる。立体感ある作への挑戦を。(大雲評)

◆筆の運びに変化が出て来て横長の紙面を上手に使っている。この大きさの作品にゆったりとした表現の中に見える激しい所が生きている。(倫子評)

(倫子評)

◆題名が心憎い。見ていると確かに、紙面に溢れんばかりの動勢だが、どこかストイックなメロディを感じさせる。もう少し細線も生かしては。(洋子評)

(洋子評)



佐藤詠子書

選評 村野大仙

今月のホープ作品

仙骨
夙著

佐々木 青 霞

漢字研究部 特選 佐々木青霞
連腕大きく伸びやかな姿態と、確かな用筆から生まれる、骨格のしっかりした筆線が美しい。潤いと温か味のある表現にも魅力を感じます。じっと見つめているとじわじわと心を引きつけられていきます。
◎漢字研究部総評
この古典は大半が横幅の広いゆったりとした姿態をしている。伸びやかな筆画がその特性

を助長している様です。また張りのある筆線にはぬくもりを失わない強靱なペネを内蔵し、皆さんの表現に迷いを持たせている様に思いました。また画のスタートとなる起筆の甘さが目立ち送筆に影響を与えている様です。原本の観察度により結果の精度に大きな差違が生じます。軽率な見方をしないようにしましょう。基本的な用筆への習熟にも関心を深め努力してください。

仙骨夙著金液
方授駕白龍而
不反玉棺遠掩

白龍而
不反玉

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不
玉棺遠掩

駕白龍
而不反

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

駕白龍
而不反

白龍而
不反玉

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

白龍而
不反玉

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

白龍而
不反玉

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

駕白龍
而不反

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

仙骨
夙著

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

齊椿忘壽夭於物
化字辨瑯而靈氣
有感仙骨夙著金
液方授駕白龍不

方授駕
白龍而

靈氣有感仙骨
夙著金液方授
駕白龍而不反
玉棺遠掩

藤翠皓晃叙素
象葉泉石舟春

惠珠由洗聲洋
泉雪香城香子

箕深 祥響初
都 秋神香

卿岳麻蕙裕敬
舟峰美月美子

